

日本の結婚式・披露宴の変遷

ーブライダル司会者の現状と課題ー

甲南女子大学 廣澤美花

日本の結婚式・披露宴は、どのような変遷を遂げてきたのだろうか。また、ブライダル司会者について、意識を向けたことはあるだろうか。

儀式は、その時代に合わせて変化を遂げる。結婚式も時代によって多種多様な形態を取りつつ行われてきた。かつての結婚式の特徴として、宗教者の関与や宗教性がみられないという点が挙げられるが（石井、2005）、明治維新による近代国家の成立以降、文明開化によって民衆の生活が大きく変容する結果となり、それまでの結婚式も変貌を遂げることになる。宗教者が司る「神前結婚式」（以下「神前式」）の誕生である。1900（明治33）年、のちの大正天皇となる嘉仁親王のご成婚が、宮中の賢所にて神道の形式で執り行われた。これが、神前式のルーツであるとされている。昨今の主な挙式スタイルは、前述の神前式、そしてキリスト教結婚式（以下「キリスト教式」）と人前結婚式（以下「人前式」）の3つである。後者の2つは、記録によれば神前式よりも古くから行われていた。キリスト教式は明治の初め頃から実施され、人前式については江戸時代から行われていたものや、森有礼らが挙げた契約結婚式（1875年）がある。一般に「古式ゆかしい」と思われている神前式は、実は、2つの結婚式の形式よりも新しい挙式スタイルであり、つまり「伝統は創られた」のである。

本報告では、まず「日本の結婚式・披露宴の変遷」として、明治から現在までの移り変わりをたどる。神前式は、明治末頃からしだいに普及していくが、大きな契機となったのは「永島婚礼会」の登場である。神主や巫女とともに、儀式に必要な道具一式を届け、神社以外の自宅や会館等で式を挙げることができるようになった。神社での式は、昭和20年代後半から30年代半ばまで増加し、その後減少するが、ホテルや結婚式場等での挙式が急増する。神前式は長らく高いシェアを維持していたが、1980年代後半からゆるやかに減少し始め、それに代わってキリスト教式が増加した。1990年代、ホテルウェディングを中心としたブライダル業界勢力図が形成され、1990年代半ば、神前式とキリスト教式の実施率は逆転するまでになった。2000年代、ゲストハウス・ウェディングの台頭があり、宗教者の関与しない人前式が再び増加してくる。「ゼクシィ結婚トレンド調査2017」によると、最新の挙式形式の割合は、キリスト教式57.0%、人前式22.7%、神前式19.3%である。

次に、ブライダル司会者の変遷を見ていきたい。披露宴の原型は会食のみであったが、挨拶や乾杯等が行われるようになり、明治記念館は1955（昭和30）年に「御結婚式・御披露宴の栞」を作成した。その後、様々な演出が競うように行われ、最近では「サプライズシンガーズ」なる演出も人気がある。このような日本特有のスタイルのなかで誕生した職業が、プロのブライダル司会である。1955（昭和30）年頃からあらわれ、役割としては、進行係・紹介者という立場から、披露宴というショーの司会・演出を担当するようになった（志田、1991）。ブライダル業界では、特定の日に婚礼が集中し、季節による繁忙期もはっきりしているので、ブライダル司会者は、非正規雇用とならざるをえない。さらに、少子化・非婚化に伴い、婚姻組数が年々減少し、今後ブライダル業界も縮小していくと推測されるが、なぜ司会者を続けているのか。非正規雇用の女性が多く従事しているブライダル司会という職種に着目し、仕事のやりがいや問題点等について理解を深め、「働く女性」の今後についても考えていきたい。

参考文献

- 石井研士、2005、『結婚式ー幸せを創る儀式ー』、日本放送出版協会
- 志田基与師、1991、『平成結婚式縁起』、日本経済新聞社